



## 大門：江戸時代

重要文化財

大門は当初、現在地よりも下方の谷にあり、結界を示す鳥居の形であった。その後、二重門形式へと変更され現在の位置に建て替えられた。大門解体修理に伴う発掘調査では、元禄元（1688）年の大門焼失に伴う火災層が検出され、基壇下からは鎮壇・地鎮遺構が見つかった。地鎮遺構には賢瓶けんびんが、鎮壇遺構には輪楯りんけんが埋納されていた。大門背面の調査では小坊跡が発見されている。



## 中門跡（中門再建事業に伴う発掘調査）

現在は、中門の礎石が残るのみであるが、中門再建事業に伴う発掘調査では、平安時代から江戸時代末期に至る中門の変遷が確認された。平安時代には道路遺構を確認し、当時壇上にあった中門へ至る道路の可能性が高い。また安永・文化・天保の火災痕跡や、各時期の中門再建痕跡を確認している。中でも文政再建時に伴う途中作業面の存在や、大規模な盛土からは、当時の再建事業の規模の大きさがうかがい知れる。



## 東塔跡（東塔再建に伴う発掘調査）

東塔跡はその再建に伴って発掘調査が行われた。再建前の基壇上面には、3間等間隔に割り付けられ内側に4基の礎石が存在しており、建立時の足場跡も確認されている。伽藍において広範囲に確認されている大永元（1521）年の火災層がここでも確認され、大火の規模がうかがえる。また、室町時代には大規模な削平がみられ、大火後荒廃した伽藍から土砂が運びだされたと考えられる。



## 山王院本殿：室町時代

重要文化財

弘法大師空海が高野山を開創するにあたり、まず初めに現在の地へ丹生明神と高野（狩場）明神かんじょうを勧請したとされている。本殿2棟はともに一間社春日造で、丹生・高野明神を祀る。総社は三間社見世棚造で、十二王子、百二十伴神、麻利支天を祀る。大永元（1521）年の大火による焼失後、大永2（1522）年に建てられた現在の建物の外部は、彫刻や彩色で華やかに彩られている。



## 不動堂：鎌倉時代

国宝

不動堂は元々「一心院」の建物で、一心院谷に現存する金輪塔付近に建っていたが、明治41年の道路拡張に伴い、現在の地に移築された。平面、外観共に複雑な形をしており、四隅の軒の納まりがすべて異なるため、4人の大工が四隅からバラバラに作ったとも言われている。建ちが低く、優美な姿をした住宅風の建築である。



## 大乗院跡駐車場整備事業に伴う発掘調査

江戸時代の子院跡「金勝院」「正徳院」に関連する石垣、溝が検出されている。また、室町時代では大永元（1521）年の火災層と、それに覆われた形で多くの一石五輪塔いっせきごりんとうが出土した。高野山では一石五輪塔は主に奥之院地区のものとされるが、山内地区でも一石五輪塔が存在することから、各子院で独自に行われた石塔供養の存在がうかがわれる。